

内モンゴル地域における定住化と経済発展によるエヴェンキ人集団の社会変容

Social Change of the Evenki Induced by the Resettlement and Economic Development in Inner Mongolia

慧 慧（国際開発学分野）

【目的】

中国の経済が著しく成長すると共に、地下資源の開発と労働力の需要増加のため国内の人口移動が活発になっている。以前遊牧を営んでいた内モンゴルでは、石炭開発と中国各地の過剰人口の流入により、遊牧の基盤になる牧草地が縮小し、或いは政府に土地自体が徴用され、遊牧から徐々に定住牧畜へ変貌した。「定住化」や「西部大開発」等の国家政策や国家主導の開発によって、特に1990年代以降、内モンゴルの遊牧は急速な崩壊過程を辿ることを余儀なくされた。このことが内モンゴル地域の牧畜民とその社会に対して何をもたらしているのか、個々の牧畜民は開発にどう対応し、社会はどう変化していくのか、本稿はこれらの問題意識を持ち、課題の解明を目指す。

【方法】

筆者は2012年8月から9月まで二か月渡って、内モンゴル自治区・フルンボイル市・エヴェンキ族自治旗で現地調査を行った。対象地域の社会関係、日常活動、生活様式について観察し、ガチャー(村)の牧畜民にインタビューを行った。本研究に用いられるのは、行政、人口構成、居住形態、牧畜経営、牧草地など土地の管理と利用、最近の重要な変化についてのデータと、牧畜社会についての日本語、中国語、モンゴル語文献である。

【分析結果】

本論文は経済開発に伴う、エヴェンキ人社会の変容を一つのガチャーを事例に実証的に検討したものである。現地調査により、明らかになったガチャーの実態は以下である。中国内地からの農耕民も現在定住牧畜を営んでいる。移住民の増加によりガチャーの人口構成に大きな変動が起きていると思われたが、さほど大きな変動が観察されなかった。その原因は、移住民たちは牧草地請負権の獲得とエヴェンキ族に対する優遇政策を利用して、子供の戸籍の民族欄にエヴェンキ族として登録したからである。

【結論】

人民公社時代、A ガチャーは集落としてすでに存在したが、生産活動の現場ではなかった。当時の生産活動は主に短期間で移動するオトル(遊牧)で行われて、ガチャーは学校教育を受ける等の個々人の特定目的のための長期居住場所に過ぎなかった。牧草地の使用は広範囲にわたり、短期間で移動遊牧する生活であった。改革開放後、家畜と牧草地が個々の牧畜民に契約の形で与えてから、私有財産を増やす個人的欲望と放牧空間の固定化が環境悪化問題を引き起こした。遊牧の定住化過程で出現した生産方式と自然環境のバランスの崩れは、近年の地下資源開発に伴って益々顕著化している。道路建設と石炭採掘などの資源開発への対応過程を通じて、都市とガチャーとの二重生活化、親族関係の変化、などが発生している。伝統的な親族関係が薄らぎ、他民族の流入などにより村という新たな地域社会の形成が始まっているともいえるが、その行方は定かたなく、今後の研究課題である。